灘の銘酒「金正宗」

下田　邦雄

私が、この銘酒に出会ったのは、三年前である。神戸の親類から、送られてきた「金正宗」は、4合瓶に収まり行儀良く箱に収まっていた。晩酌が楽しみである私は、早速冷蔵庫に入れ夕方になるのを待った。妻の料理を「あて」にして、「金正宗」の封を切った。初めての体験を前に少し緊張している自分を感じながら、グラスに注ぎ口に含んだ。芳醇な香りが、鼻腔を刺激しその後のどに落ちた。一口目は甘さを感じたが、まったく後に引かないものであった。これは旨い。思わず、ひざを打った。これが、この酒との初対面であった。飲み終わった後に、灘から送られてきた「金正宗」とは、何者であるのか知りたくなって調べて見た。

製造元は、灘五郷の酒造家「㈱松尾仁兵衛商店」である。松尾仁兵衛商店は、魚崎の旧家で、その酒造業は18世紀初頭の元文期に始まるとされている。時代の背景を見ると、天利5年（1619）に堺の商人が、菱垣廻船を発明し上方の酒を海路江戸に送るようになり、正保年間（1644～47）には樽廻船という酒樽専用船が大阪と江戸の間を3日ないし7日で通うようになり、享保年間（1716~35）には灘の文字が文書に現われるようになった。当時は伊丹、池田の酒が江戸では主流であったが、灘の地が輸送上の優位に立ち、灘酒の勃興の兆しが見えかけた頃に創業したといえる。江戸後期には、酒造業にとどまらず、地場産業である素麺や醤油醸造業にも関与しており、幕末期には、庄屋や酒造家をまとめる、酒造大行事などを勤めている。

金正宗の酒銘の由来は定かではないが、金正宗の商標は、銀正宗、鳳紋、神亀（シンキ）とともに明治17年の商標条例が実施されたときに商標登録された。

昭和に入り、第二次世界大戦が深刻になった昭和18年企業整備法が発令され、当時の大蔵省の指導で、灘五郷でも清酒製造業の企業合同が実施された。しかし、昭和20年の8月5日に空襲に合い、幾つかの蔵を失った。その後、昭和24年に企業合同から独立し「金正宗」の酒銘を選んで再開したとされる。

長々と、松尾仁兵衛商店と灘五郷のことを語ってしまったが、今この「金正宗」は、この世に存在していない。それは、何故かというと平成7年1月に起きた阪神淡路大震災が原因のひとつである。あの大震災で、灘の数々の酒造家が痛めつけられた。つい最近まで製造されていた「金正宗」は、平成20年5月に打ち切られた。まことに残念ではあるが、今では、幻の酒となってしまったのである。

各地の銘酒を堪能しながら晩酌を、楽しみのしている筆者としては、親しい友人をなくしたような暗澹たる気分を味わっている。新しい友人が見つかるまで、少し時間が掛かりそうである。

＜参考文献＞

・醸界えんぴつ　“決断”在魚崎五百有余年の㈱松尾仁兵衛商店（前編）（後編）

・酒文化研究所　酒文化アーカイブ

金正宗のラベル